

World Englishes にみられる 時制・アスペクトの表れ方についての覚書

山 田 昌 史

A Short Note on Tense and Aspectual Expressions
in World Englishes

Masashi YAMADA

2017年9月7日受理

抄 録

拙論では、世界各地にみられる英語の変種 (World Englishes) について、Kachru (1992) の3分類に基づいて、それぞれの Circle に属する英語変種をその時制とアスペクトの表れ方に注目して事実をまとめた。それぞれの変種は、英語の歴史的な変遷から生じるもの、その変種が根ざす国や地域で主として使われている言語と英語との混交などから生じることを先行研究を中心に議論した。

キーワード：世界の英語、時制とアスペクト、形態素、英語の変遷

はじめに

拙論では、世界各地にみられる英語の変種 (World Englishes) について、特に文の時制とアスペクトの表れ方に注目して事実をまとめ、英語の歴史的な変遷やその変種が根ざしている母語や地域言語、またはその周辺の国や地域の言語変種等の影響がどのように現れ、それぞれの英語の変種がどのように形成されるのか、英語変種に関する今後の理論研究の端緒になるように、先行研究で指摘された言語事実をまとめることを目的とする。

Kachru (1992) は、世界各地に見られる英語の変種をその使われる状況から3つに分割している。英語を母語として使用する Inner Circle、第二言語として使用する Outer Circle、外国語として使用する Expanding Circle の3つである。拙論では、それぞれの Circle の属する英語の変種を先行研究からまとめていく (1節～3節)。そして、4節で日本語母語話者の英語における時制とアスペクト表現の誤用に関する先行研究から日本語における英語変種の可能性を指摘しながら拙論をまとめる。

1. Inner Circle にみられる時制・アスペクト表現

本節では、英語が母語として使われている地域にみられる英語の変種について2つのケースを取り上げる。

まず、アイルランド英語 (Irish English) の現在完了の用法について取り上げる。Kirk (2017) は、この変種では、標準的な英語の完了形の用法に加えて、標準的な英語と異なる6つの文法的手段で完了形と同等の意味内容を表すことができることを観察している。

- (1) a. The wife and children **are after going** off there the other day.
- b. You see I **have Jonathan's number written** on his card.
- c. That's somebody who **has had the actual harm done** to them.
- d. Oh she's **gone** about <,> oh I suppose five or six years <,>
- e. Oh well you **already lent** them.
- f. I **know** him since primary school. (Kirk (2017): 243)

Kirk (2017) によると、(1a) は after-perfect と呼ばれ、直前に飛び込んできたことを伝える新情報とともに緊急性や新奇性のニュアンスを伝える表現である。(1b) は medial object perfect と呼ばれ、完了の意味を表す表現で、(1c) は pseudo-perfect と呼ばれるものである。2つの形式はよく似ているが、(1b) は動詞の過去分詞の表す事態の主体がその直前の名詞(目的語)であり、この名詞の完了事態を過去分詞が表しているのに対し、(1c) は完了事態を表すものの、その目的語の完了事態を表していない点で(1b) と異なる。これが、(1c) が「擬似的な完了」と呼ばれる所以である。また、(1d) のように、助動詞 have ではなく be を用いて動作の継続を表すもの、(1e) のように過去形に完了を表す副詞を付加して経験を表すもの、(1f) のように現在形に時間的な持続期間を表す副詞句とともに継続の意味を表すものがあるとされる。これらの表現は、他の地域の英語変種や英語の歴史の変遷の中から生じたものであると考えられている。

Irish English と同様にイギリス標準英語の変種である Shetland English では、過去時制を表す was と were に混交が見られることが観察されている。

- (2) a. There *was* whole whole families out sledging.
- b. There *was* lots of chairs and that about.
- c. Her lungs *wasn't* fully developed.
- d. Me and Joanna *was* actually speaking about this.
- (3) a. There *were* a caravan site.
- b. There *were* nae swimming pool at that time. (Durham (2013): 109)

標準英語では、(意味上の) 主語の数によって was と were が使い分けられ、単数に

was、複数に were が用いられるが、(2) - (3)のように Shetland English ではそれが逆になっている。これらの変種は、複雑な歴史的背景及び近隣の変種との混交から生じたものと推察されている。Durham (2013)によると、北部の英語では歴史的に was と were の混交がみられたとされる。Northern Subject Rule と呼ばれる北部イングランドやスコットランドの英語では、3人称複数の主語が代名詞の they であれば were、それ以外の名詞句であれば was に一致する規則 (cf. (4a-4b)) が残っていたり、イングランドのいくつかの英語変種の中には、肯定文では was、否定文では were が用いられるものがある (cf. (4c-d)) という。

- (4) a. They *were* the best team.
 b. The chances *was* I would go downstairs.
 c. there *was* a boat shed.
 d. there *werena* much input fae the architect. (Durham (2013): 113)

このように、(2) - (3)の Shetland English の was/were の混交は歴史的な変化と近隣の英語変種の影響が絡み合って生じていると考えられている。

Durham (2013) は、さらに、Shetland English の was/were の混交が社会的、特に年齢的な要因によって使い分けに差が見られ、若い世代ではこのような混交が失われつつあり、標準的な英語の用法へと変化していることを観察している。

Shetland English と同じように、was や were が標準英語と異なるものは、他の Inner Circle に属する英語変種にも見られる。以下のように African American English では主語の人称に関わらず was が用いられ (cf. (5a-b))、Yorkshire の英語変種では、その全てが were が用いられる (cf. (5c-d))。

- (5) a. They *wasn't* prejudiced up there then.
 b. You *was* in the choir with Melanie.
 c. I *were* broke on a Monday.
 d. Everything *were* going great. (Durham (2013): 108)

このように、Inner Circle に属する他の英語変種にも was と were の標準的な用法とは異なるものがみられる。

本節では、英語を母語とする地域にみられる標準英語とは異なる英語変種について、特に Irish English の多様な表現で完了事態で表す表現や Shetland English にみられる was/were の混交について観察した。これらの変種では主に、英語の歴史的な変遷や近隣の地域方言との交わりによって変種が生じていることが明らかになった。

2. Outer Circle にみられる時制・アスペクト表現

本節では、英語を第二外国語として使用する国や地域で使われている英語変種において、標準的な英語と異なる時制とアスペクト表現についての先行研究をまとめる。

まず、シンガポール英語について観察する。この変種には *I went already lah.* のように完了の意味を表わす副詞 *already* を過去形に付加して表すことを河原・川畑 (2006) が指摘しているが、さらにシンガポール英語には、標準英語とは異なる完了事態の表し方がある。

Hiramoto & Sato (2012) は、シンガポール英語には標準英語とは異なる完了を表す表現として *got* を用いるものがあることを観察している。シンガポール英語では *got* は以下のように主に3つの意味で使われるという。

- (6) a. *You got nice shirt.* (Possessive)
 ‘You have a nice shirt.’
 b. *He got go to Japan.* (Perfective)
 ‘He has been to Japan.’
 c. *Here got very many people.* (Existential)
 ‘There are many people here.’ (Hiramoto & Sato (2012): 199)

特に (6b) の例では、*got* が完了形の *have* と同じような役割を担っていると考えられるが、後続する動詞は原形である点が標準的な英語の完了形と大きく異なっている。この完了の表現は、習慣 (*habitual*)、経験 (*experiential*)、完了 (*completive*) の3つを表すという (cf. Lee et al (2009))。以下が *got* が経験の意味で生じている例である。

- (7) *I got go Japan.*
 ‘I have been to Japan.’ (Hiramoto & Sato (2012): 200)

興味深いことに、完了の意味を表す *got* が疑問の形で使われると、標準的な英語の完了形が表す主語の過去の経験を表すことができないとされる。

- (8) *You got wash your hands?*
 (i) ‘Did you wash your hands just now?’
 (ii) *‘Have you washed your hands before?’ (Hiramoto & Sato (2012): 200)

(8)では、(ii) のように過去の経験の意味はなく、過去に生じた出来事の意味しか表さない。同様なことは、習慣の意味を表す *got* でも観察される。

- (9) *Got volunteer at the animal shelter?*

- (i) ‘Do you / Did you used to volunteer (regularly) at the animal shelter?’
- (ii) *‘Have you ever volunteered at the animal shelter?’

(Hiramoto & Sato (2012): 200)

この疑問文でも習慣的な意味を表すことができるが、過去の経験を表すことができない。このように、got には標準的な英語の完了形が表す意味とは異なる性質があることが観察されている。

このような特徴を持つシンガポール英語の got だが、Hiramoto & Sato (2012) によると、標準中国語の yǒu、閩南語 ū、広東語の jāu などがその由来として推定されているとされる。つまり、シンガポール英語の got の特殊な用法は、シンガポールの英語以外の公用語である中国語の変種との接触によって生じたと考えられている (cf. Hiramoto & Sato (2012))。

van Rooy (2014) は、Outer Circle に属する 2 つの英語変種 (Black South African English (BSAfE と略す) とインド英語に見られる状態動詞の進行形について観察している。

- (10) a. His father was having many cattle.
- b. At the moment we are not having any material. (van Rooy (2014): 158)

標準的な英語では、状態動詞は進行形として生じないが、BSAfE では進行時制と不定時制の混乱がみられ、(10) のような進行形がみられるという。これは、BSAfE が根ざすバンツー語が様々な未完了時制を区別せずに表すことから生じると推定されている。

Van Rooy (2014) はさらに、インド英語の習慣的な意味を表す進行形の用法を観察している。

- (11) Generally only dry-cleaning clothes **are coming**. (Van Rooy (2014): 159)

同様の例は、Davydova (2012) にも見られる。

- (12) Sometimes I **am** easily **falling** ill.
‘I easily fall ill.’ (Davydova (2012): 371)

Davydova (2012) は、このようなインド英語にみられる習慣を表す現在進行形は、ヒンディー語とパンジャブ語では現在の習慣を表す際には主動詞とコピュラの複合体で表すことから、この影響を受けてこのような英語の変種が生まれていると推察している。

加えて、Davydova は、インド英語には標準英語とは異なる過去完了の使い方があ

るという。

- (13) a. Where you've been to?
b. I **had** once **gone** to Andhra Pradesh. And it was quite interesting for me. Because I had to cross I think, three states.
'I have been to Andhra Pradesh.' (an experiential reading)
(Davydova (2012): 373)

(13)のような表現はヒンディー語で経験を表すために過去完了形を用いるために、この影響を受けてインド英語では、標準的な英語では現在完了を用いるところで、過去完了形が生じるという。

この他にも、マレーシア英語では、前節のアイルランド英語の (1e) と同様に過去形の前に標準英語で完了形を使う際に用いる副詞を置くことで完了事態を表す用法があり (= (14a))、また、フィジー英語では、been で過去形を表して、それを動詞の前に置く用法がある (= (14b))。

- (14) a. I already lent before Karen came. (河原・川畑 (2006):74)
b. I been study all week. (河原・川畑 (2006):195)

このように、英語が第二言語である Outer Circle に属する英語の変種は、その国や地域に根ざす言語との接触によって英語の変種が生じていることがわかる。

3. Expanding Circle にみられる時制・アスペクト表現

本節では、英語を外国語として使用する国や地域で使われている英語の変種において、標準的な英語と異なる時制とアスペクトの現れ方について事実をまとめる。

Davydova (2012) は、ロシア英語に見られるアスペクトの特徴について述べている。ロシア英語、特に上層のロシア英語では、完了形や進行形について標準英語とほぼ同じように使われるものの、以下の例のように進行形が十分に使われないことがあると述べている。

- (15) This kind of collective thinking is very vivid and the way in which people behave and the way people live together... But I think the system of values in the European society is different from what it used to be in the Soviet society, that's what I can see. But now, I think that the system of values converge ...
'... the system of values is converging.' (Davydva (2012): 378)

その一方で、ロシア英語（下層方言）では、前節でみたインド英語と同様に、標準英語で現在完了を使う文脈で現在形や過去形を使う傾向がみられるとされる。

- (16) a. My life **didn't change** with the internet. – a resultative reading
b. Have you ever been to Hamburg?
– Hamburg? Yes, I **was**. – an experimental reading
c. I'm **studying** English for six years. – a continuative reading
(Davydva (2012): 379)

Davydva (2012) は、ロシア英語（下層方言）の方がインド英語よりも標準英語で現在完了を使う場面で現在形や過去形が生じる例が多いことを観察している。

また、Mahboob & Elyas (2014) はサウジアラビアの英語の変種を観察している。以下は、英語の文法を説明するテキストで、英語の完了形の説明に続けてその使用例として挙げられている文章の一部である。

- (17) He has had two or three jobs since he returned to the Kingdom. He **has worked** for Saudi Radio for two years. Then he **has interviewed** people for various programmes on TV for six months. He is soon going to have his own programme 'In Focus'.
(Mahboob & Elyas (2014) : 136)

(17)では2箇所で現在完了形が使われているが、どちらも過去にある期間続いて、その期間で完結した出来事を表し、現在と繋がる出来事ではないので過去形を用いるのが標準的な英語として正しい。しかし、現在完了形が用いられている。Mahboob & Elyas (2014) によると、このような英語の変種が生じるのは、アラビア語では現在完了という時制がないために、過去形と現在完了の混同が生じると推定している。

本節では、Expanding Circleの英語変種について先行研究の例をまとめた。このCircleにみられる英語変種は、それが根ざす国や地域の母語の影響を受けて英語の変種が生じていることが明らかになった。

4. 結語

拙論では、これまでKachru (1992) の提案する英語変種の3つのCircleに基づいて、それぞれのCircleにみられる英語の変種について、それが生じる要因について先行研究をまとめた。

Expanding Circleに属する日本でも、日本語の時制やアスペクトの用法に影響を受けた英語変種が存在することが観察される。太田 (1977) の日英語の時制とアスペクトの体系の違いをもとに、守屋 (2012) は日本語母語話者の英語の誤用の原因をまとめている。太田 (1977) によると、日本語の時制体系から考えると、日本人の英語

学習者は以下のような英語の時制やアスペクトに誤用が生じるという。

- (18) a. 英語の現在形と未来形の区別
b. 英語の過去形と完了形の区別
c. 日本語では「ている」が現在の状態、進行相、完了相、結果相などを表すため、英語の単純現在形、進行形、完了形相互の混同が起きやすい。
(守屋 (2012): 88)

拙論でこれまでに議論してきた例に相当するのは(18b)と(18c)である。守屋によると、日本語では過去と過去完了形の区別が明確でないことから以下のような誤用例が見られるという。

- (19) a. *She was a student for the last few years.
b. *She was sick for two years by then. (守屋 (2012): 88)

どちらも標準英語では完了形で表すが、日本人の英語学習者は日本語では「学生であった」「病気だった」とどちらも過去を表すタ形で文が終わることからこのような誤用が生じるとされる。また、以下のように日本語の「ている」は表す意味範囲が広いため、以下のような誤用が生じるとされる。

- (20) a. *John is departing. (for 'John has departed.')
- b. *He is visiting Japan in 1921. (for 'He visited Japan in 1921.')
- c. *John is remembering his father. / *John is belonging to this club.
- d. *The train has been arriving. (for 'The train has arrived.')
- e. *He has written the letter for two hours. (守屋 (2012): 88-89)

(20a-d)では、どれも日本語では「ている」を用いるため、英語の進行形を用いる誤用が生じている。(20e)は、本来、進行形を使うべきところにそれが使われず誤用が生じている。このように、日本語の「ている」は意味的範囲が広いために、その影響を受けて英語の誤用が生じていると分析されている。

同様に、前田 (2012) は日本の大学生の英語の誤用例として以下の例を挙げている。

- (21) a. 私は京都に5年住んだことがあります。
b. I have lived in Kyoto for five years.
c. I lived in Kyoto for five years. (前田 (2012): 9)

(21a)の日本語に対応する英語表現として正しいのは(21c)であって(21b)ではない。しかし、大学生の約半数が(21b)のように英訳し、また、had livedのような過去完

了形で表現する学生が40%ほどがいることが前田によって報告されている。このような誤用は、「～したことがある」が「経験」を意味し、英語では完了形で表すとの類推から生じたものであると前田は推察している。

このような日本語母語話者の英語の時制やアスペクトの誤用は、英語学習の面からみれば、学習の過程で生じる単なるミスであるが、3節までにみた英語の変種という観点からみれば、日本語の時制、アスペクト体系の影響を受けた日本における英語の変種と分析できるのではないだろうか。

拙論では、Kachru (1992) の英語変種の分類に基づいて、3つの Circle にそれぞれみられる英語変種について先行研究から事実をまとめた。それぞれの Circle には、英語の歴史的、地域的な状況など様々な要因が複雑に絡み合って変種が生じていることが明らかになった。その上で、英語を知ることが標準的で規範的な英語だけではなく、様々な英語変種について知ることがこれからの社会には必要であると認識されると共に、英語の理論研究の題材として、それぞれの変種の分析を通じて人間言語の普遍的及び個別的基盤を追究する研究に寄与すると考えられる。

(参考文献)

- Davydova, Julia. (2012) Englishes in the Outer and Expanding Circles: A comparative study. *World Englishes* 31-3, 366-385.
- Durham, Mercedes. (2013) Was/Were alternation in Shetland English. *World Englishes* 32-1, 108-128.
- Hiramoto, Mie and Yosuke Sato. (2012) Got-interrogatives and answers in Colloquial Singapore English. *World Englishes* 31-2, 198-207.
- Kachru, B. Braj. (1992) *The Other Tongue: English Across Cultures*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- 河原俊昭・川畑松晴 (編) (2006) 『アジア・オセアニアの英語』 めこん
- Kirk, M. John. (2017) The present perfect in Irish English. *World Englishes* 36-2, 239-253.
- Lee, Nalta H., Ling Ai Ping, and Nomoto, Hiroki (2009) Colloquial Singapore English *got*: Functions and substratal influences. *World English* 28-3, 293-318.
- 前田浩 (2012) 「日本の大学生が書く英語の問題点－日本の英語教育の観点から」『新島学泉短期大学紀要』第32号 1-17. 新島学園短期大学
- Mahboob, Ahmar and Tariq Elyas. (2014) English in the Kingdom of Saudi Arabia. *World Englishes* 33-1, 128-142.
- 守屋哲治 (2012) 「日英語時制体系の対照言語的研究：英語学習者の誤用の傾向を踏まえて」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』第4号 85-95. 金沢大学
- 太田朗 (1977) 「日英語の比較－時制と相について」『英語学と英語教育をめぐって』

211-252. ELEC.

van Rooy, Bertus. (2014) Progressive Aspect and stative verbs in Outer Circle varieties. *World Englishes* 33-2, 157-172.